

○表具屋與兵衛傳

此の者は、世々與兵衛と呼ばれて、表具師を商業となし、數代居住せしゆゑ、家の横町をば世人表具屋小路と呼べり。昔より數度火災に逢ひ、記録類等都て傳來せざる故に詳かならずといへども、舊傳に云ふ。先祖は朝日與兵衛と稱し、武士なりしとて、武具など傳來せしかど、火災に燒失せり。東御坊町創立の頃より此の地に居住し、東本願寺別院いまだ此の地に造立なき以前より爰に居住すといひ傳へたりとぞ。今も苗字を朝日と稱す。

○極樂橋

此の橋は、舊藩中は惣構堀の橋なりしゆゑ、橋爪に橋番人の家ありて、極樂橋の橋番人といへり。町會所留記に載せたる元祿元年十月捨子届書に、東末寺前惣構番人五右衛門・伊右衛門の兩名を載せたり。此の橋は東御坊町より西御坊町へ往く橋にて、東西兩末寺の間なる橋なりし故に、俗に極樂橋と呼びそめたるかといへり。按ずるに、昔本源寺城内にありし時、門前の橋を極樂橋といへり。本源寺は後に西末寺とすれば、城地にての橋名を移し呼びたるなら

んか。

○稻荷川

龜尾記に云ふ。東本願寺末寺の後なる堀より堀川へ出づる流水をば稻荷川と呼べり。いにしへ此の地邊に稻荷の祠あり。故に爾いふなり。但し今は此の名知るものなしといへり。

○熊坂橋

金澤橋梁記に、熊坂橋東御坊横堀ばた。とあり。此の橋も舊藩中は惣構堀の橋なる故に、橋爪に橋番人居住す。町會所留記に載せたる貞享五年十月捨子届書に、熊坂橋惣構番人吉兵衛とありて、貞享以前より熊坂橋と呼べり。如何なる由縁にて起りたる橋名にや。龜尾記に相傳ふ。いにしへ今の橋番の所に、熊坂と異名せし男だて居たるを以て名付くといへり。

○荒木善太夫邸跡

延寶の金澤圖に、荒木善太輔と記せり。元祿六年の士帳に、荒木六兵衛御坊町橋見付角とありて、子孫世々爰に居住せしかど、廢藩の後退去せり。

○荒木六兵衛傳話

加邦録に云ふ。傳聞に、昔金澤城地にありし本源寺の家老に松田次郎左衛門とて、加賀郡の棟梁也。小立野寶幢寺揚地より、奥村助左衛門邸・出羽町へかけて居城となし、本丸は寶幢寺揚地へかけ、清水有つて用水とし、松山寺邊二郭にて、成瀬氏邸地は三郭搦手とす。細長き繩張にて、八坂道は馬場跡也と云ふ。其の外宗徒の者共、皆所々に搔上げを構へて蟠居し、土民を隨從して我意をふるまふ。又厚川の下米泉村には、須崎兵庫とて石川郡を押領し、本源寺と威勢を争ひて互に鉾楯度々戦ひ、河北の本源寺方には、樋口・石浦杯の武勇の者多勢なれば、中々急には打勝ち難く、須崎兵庫さまく秘計を廻らし、一旦和睦をなして、互に中直りの嘉儀をとりやりし、其後松田杯を米泉の館へ招き饗應をなし、善盡し美を飾り、妓女を出し、酒宴を催し、饗應數刻に及ぶ。爰に松田が甥に石浦主水とて、今慈光院の邊に居城をなし、是も松田と一所に米泉へ行き、聊か狐疑の跡もあらざれば、伯父次郎左衛門と共に沈醉して、淺間しかり次第也。其中にも主水は餘り酒にも酔はざりし

かば、露地へ出で、あなた此方の流れ、水底の景氣をも打詠めけるに、藪陰に討手の者とおぼしくて、遅しき兵數人隠れ居たり。主水打驚き、そのまゝ松田に告げ知らしめんとせしかど、沈醉して前後をも知らず。主水は密かに堀を飛越え、道を尋ねてやう／＼に逃歸る。松田は沈醉せしゆゑ、やす／＼と討たれ、郎等手の者必死と成り働くといへども、多勢に無勢叶ひ難く、悉く討死す。松田が馬捕三右衛門といふ者は、敵一人討取り、其の身淺手も負ひたりしかど、主人の馬に打乗りて飛ぶが如く駈歸り、跡を見かへるに、はや須崎が多勢二手に成りて、旌旗天を掩ふが如く、時を移さず押寄せたり。三右衛門は石浦が方へ立寄り、兩々のよしをば告げ知らせ、さて主人の居城へ馳歸り、留守居の者へ主人のありさまを語り、敵はや押寄する也、何れも防禦の下知をなして、後詰を待給ふべしと、留守居の者へ告げ知らせけるといへども、勇激の者共は皆米泉にて討とられ、石浦もはや落城と見て、煙火天を掠め、鬨の聲は耳もとへ聞えぬ。家僕共はや逃失せて、耻有る者は僅に十人許相残り、中々一方をも防ぐべきやうなし。次郎左衛